

韓国の日本語会話教材に関する傾向分析*

長原成功**
narika77@kangwon.ac.kr

〈目次〉

1. はじめに	4.4 著者
2. 先行研究	4.5 教材の頁数
3. 調査方法と範囲	4.6 カセットテープやCD、MP3の有無
4. 韓国の日本語会話教材に関する出版傾向	4.7 電子書籍
4.1 各年度別出版数	4.7.1 日本語会話教材の電子書籍年間出版数
4.2 シリーズの有無	4.7.2 電子書籍の価格
4.3 価格	5. おわりに

主題語: 日本語会話教材(japanese conversation textbook)、電子書籍(Ebook)、出版数(Number of books published)、教材の価格(Price of textbooks)、頁数(Number of pages)

1. はじめに

2010年度『教育統計年報』(韓国教育開発院)によると、韓国における日本語学習者は96万人とされ、高校においても日本語の履修者は37.5万人と、中国語履修者が16.9万人であることを見るとその数は二倍以上を占めている¹⁾。また、ソウル内における教育機関としては大学54校²⁾、高等学校234校、中学校138校、住民センター、生涯学習センターなどの政府機関132ヶ所、「学院」と呼ばれる民間の語学機関21ヶ所³⁾、会社やデパート内での教育機関3ヶ所、その他⁴⁾が2ヶ所と計584ヶ所で日本語教育が行われている⁵⁾。これらの日本語の

* 本論文は2013年度江原大学校学術研究助成費によって研究したものである。

** 江原大学校 人文大學 日本學科 助教授

1) <http://www.jpif.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/korea.html#JISSHI> 参照

2) 同じ大学であっても教育機関が違っている場合は別々のカウントとした。

3) 21ヶ所という数字は国際交流基金が調査対象となった機関に要請をし、回答のあった機関の結果を取りまとめたものであるため実際の数とは一致しない。

4) その他とは「産業情報学校」や「陸軍士官学校」などの特殊学校のことを指す。

5) 上の統計は国際交流基金に出ている「日本語教育機関リスト」をまとめたものである。

需要に伴って日本語関係の教材も数多く出されており、その種類も総合・読解・聴解・作文・会話・文法・文型・語彙・日本事情・試験対策など多岐にわたって出版されている。

和田(2012)の日本語学習者に対する学習動機調査では現在も日本語学習を継続している学習者335名に対し「以前、日本語を勉強しようと思った時、なぜ日本語を勉強しようと思ったのか」という設問調査を行った結果、「日本の歌やドラマ、アニメ、マンガ、ゲーム、映画などが見たいから」と「日本人とのコミュニケーション」が計124名(全体の37%)でもっとも多かった。これらの結果から日本語学習者は「見て」、「聞いて」、最終的には「話ができる」ようになりたいという動機を持って日本語学習を始めるということが分かる。

日本語でのコミュニケーションとは「日本語による意志・思想などの伝達」を意味しており、我々社会生活を営みながら日本語を通してさまざまな情報や自分の感情、意見を伝達し合い、谷口(2001)⁶⁾ではコミュニケーションするための能力として①文法能力、②社会言語能力⁷⁾、③談話能力⁸⁾、④ストラテジー能力⁹⁾の4つの能力がなければならないとした。これらの能力を整理すると「話者が持っている知識を使って、さまざまに起こり得る場面に對して適切且つ的確に該当言語を使用する」ということになる。

しかし、日本で日本語を学ぶということは現実の日本語だけの社会の中で実際に日本人とコミュニケーションを持っていかなければならないという環境であるため実生活の中でありとあらゆる場面に遭遇することができるが、韓国にいながらの日本語学習となるとかかなりの制約がついてくる。最近は中学校や高等学校でも日本語を母語とする日本語教師が教えたり、大学の教養科目も日本人が教えているところが多くはなっているが、常に日本人に接することのできる環境であるとは言い難い。また、民間の語学機関でも一日50分や90分の授業時間で自ら発言できる時間となると一クラスに10名いれれば単純計算しても5分や10分しか与えられないということになる。このような背景の中で韓国では1960年代を皮切りに毎年日本語会話の教材が開発され、現在では数百冊にも及ぶ会話教材が売り出され、日本語の授業を取るにせよ、独学するにせよ日本語に触れられる教材は非常に多いと言える。その種類も旅行用日本語会話教材、独学用会話教材、講義用会話教材、ビジネス用会話教材、シリーズものの会話教材、フリートーキング用会話教材など多様で、教育機関や

6) 『日本語教育学を学ぶ人のために』の表紙には編集者として青木直子・尾崎明人・土岐哲が書かれているが、本の中では実際の執筆者の名前が書かれており、誤解を避けるため実際の執筆者を載せた。

7) 社会言語能力とは場面に応じ、言語を適切に使用して理解するための能力を指す。

8) 談話能力とはコミュニケーションを通してなんらかの目的を遂行するために必要な話の展開能力を指す。

9) ストラテジー能力とは実際の場面などでコミュニケーションがうまくいかなかったとき、それをどう修復するかという能力のことを指す。

学習者のニーズによっていろいろな形で使われている。

本稿では韓国の日本語会話教材における総括的な調査分析していくことにする。具体的には市販されている日本語会話教材に対し、①各年度別出版数、②シリーズの有無(単独本なのか組になっているものなのか。)③価格、④著者(著者が韓国人なのか日本人のか、また、単著なのか、共著なのか)、⑤各教材のページ数、⑥カセットテープやCDの有無⑦電子書籍の有無などを調べていく。

2. 先行研究

日本の日本語教材研究としては吉岡(2012)がある。吉岡では日本で出版された1946年から2010年までの日本語教材を網羅し、書名、著者、発行機関、レベル、対象者、分野、媒体などのリストを作成して、各年度別に出版数や学習内容、学習対象者、媒体などを通して日本語教材の変遷を調べた。さらに、年度別に日本語教材の動向を考察した。1970年代ではコミュニカティブ・アプローチの影響を受け、話題シラバス、機能シラバス、トピックシラバスなどの従来にない教材が出始めた時代とし、1980年代後半からは教室活動として、従来のパターン・プラクティスを中心とした反復練習や暗記などが多かったものが、絵などをたくさん入れて学習者が積極的に楽しく参加できるような文型練習に変わり、タスクやロールプレイ、シュミレーション、プロジェクトワークなどが教室で行われるようになったとした。また、テーマを中心にした教材自己表現活動中心の教材、つまり教師が中心となるものではなく、学習者からの自発的な発話を基にした授業ができるような教材へと新しい動向が見えてきたとしている。

韓国での研究としては沈(2000)の日本語教材分析がある。日本で出版されている特定のシリーズものの日本語教材に対する文型・文法事項、言語機能、情報伝達などを取り上げて日本語教材の在り方や構成法について検討し、問題点を提示した。また、金(2007)でも沈とは違う二種類の教材に対する比較分析を行い、シラバスや言語習得観、方法論などにおける背景の違いなどを考察した。検校(2005)では韓国での日本語教育の方向性として「総合的日本語教育」をあげ、それをふまえた日本語教材の在り方を具体的なコンセプトに分けて、理想的な教材の構成を提示した。また、趙(2010)では韓国における日本語教材に関する論文239本について調べ、その結果「高校生用の教材に関する研究」、「一般人用の教材に関する研究」、「教材作成および開発に関する研究」、「教材活用に関する研究」、「中学

生用の教材に関する研究、「教材開発に関する研究」の6つの分野に分け、それぞれの比率を出して分析した結果、高校生用の教材研究が最も多く、特に語彙と文法の割合が多いことを指摘し、今後の教材研究では語彙と文法以外に目を向ける必要があることを主張した。日本語会話教材に関する研究では栗飯原(2008)の研究があるが、韓国の会話教材ではなく、日本で出版されている会話教材のうち、1980年代から2008年まで出版された94冊に対する中級会話教材に対する問題点を指摘したが、選定した一部の教材は会話のための教材だけでなく、総合的日本語能力を養う教材もかなり含まれており、会話教材の基準があいまいになっている。韓国における会話教材については研究がまだなされておらず、本研究では韓国の日本語会話教材の総合的な出版傾向を調査することにする。

3. 調査方法と範囲

本稿で調査する教材は2000年から2013年にかけて出版されたものとし、韓国のインターネット書籍サイト「教保文庫」の検索欄にハングルで「日本語会話(일본어회화)」という検索語を入れ、ヒットした1170件の結果に対して調査を行う¹⁰⁾。出た検索結果に対しては2000年から2013年までのものを再度抽出し、そのなかの「日本の出版物¹¹⁾」、「リスニング用テープ」、「単語集」、「解説ブック」、「学術論文」、「会話と関連性のない教材」については調査の対象外とする。最終的に抽出された「日本語会話教材」については種類別にさらに「一般の会話教材¹²⁾」、「旅行用会話教材」、「日本語業務用会話教材¹³⁾」、「会話用辞典¹⁴⁾」に細分して分析することにする。

10) 「教保文庫」にした理由は他の大型インターネット書籍では「yes24」が763件、「アラジン」が858件、「インターパーク図書」は701件と、「日本語会話」に対する結果が最も多かったためである。調査日は2014年2月26日である。

11) 日本で書かれた出版物のうち、韓国の出版社とライセンス契約をして出している場合はカウントすることにする。

12) 一般の会話教材には会話表現の教材も含めることにする。

13) 「日本語業務用会話教材」という分類は「ビジネス」、「観光ガイド」、「客室業務」、「ホテル業務」を一括にして表現したものである。

14) 本来「辞典」という言葉の意味は「見出しの言葉を一定の順序に並べ、発音・意味・用法・事柄の内容などを説明した書物(日本語大辞典)であるが、韓国で出版されている「日本語会話辞典」はだいたいにおいて「各状況に対する説明、解説、そして状況に合った会話文、主題別に多様な表現などを入れて日本語会話に役立てる」意味を持った教材のことを指している場合が多いため、本研究でもカウントすることにした。

4. 韓国の日本語会話教材に関する出版傾向

4.1 各年度別出版数

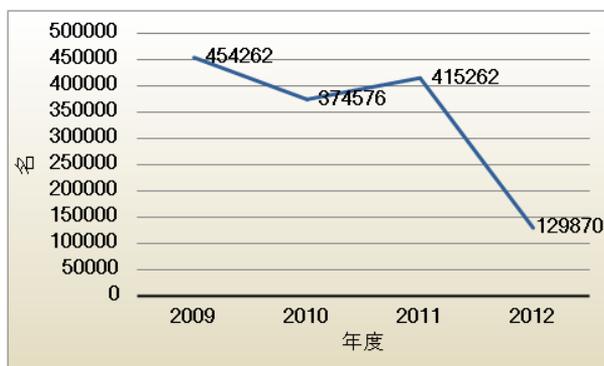
2000年から2013年までの韓国における日本語会話教材の出版数を集計した結果、総出版数は490冊となり、それらを各年度別にグラフに表すと次の通りとなる。



〈図 1〉各年度別出版総冊数

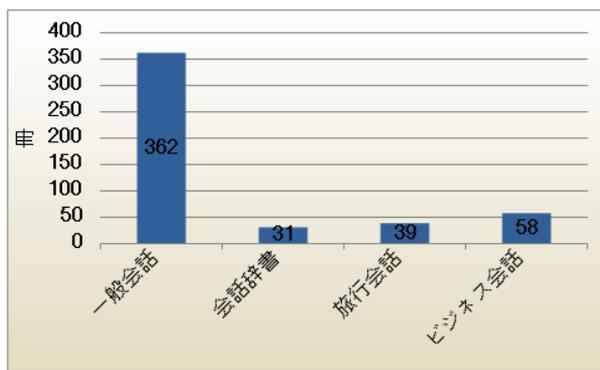
上の結果は各年度で抽出された一般の会話教材・旅行のための会話教材・業務のための会話教材・日本語会話用辞典・会話表現のすべてを足した冊数の結果である。この結果を見て分かることは日本語教材出版の全盛期と言えるのは2006年から2008年にかけてであり、2013年に出版された冊数の約3倍も多い数値となっていることが分かる。また、2012年から2013年にかけて出版冊数が急激に低下してきているのを見ると日本語の需要が減ってきていることが予想される。ちなみに韓国の教育統計サービスで出されている一般系高等学校¹⁵⁾第2外国語として日本語 I・IIを学習している学習者数の統計をまとめてみると以下の通りになる。

15) 一般系高等学校とは特定分野の専門的教育よりは一般教科目を中心に教育する学校のことで、その中には人材育成のために特定の教育課程を強化した学校も含まれる。例えば、科学、芸術、体育中心の学校などがある。



〈図 2〉 高等学校第2外国語として日本語を学んでいる学習者数

図2を見ても分かるように韓国の高等学校で第2外国語として日本語 I と II を学んでいる学習者数も2012年から前年までの3分の1以下となっている。これらの事実からも高等学校における日本語学習者だけでなく、大学生や社会人の日本語学習者数も減少しつつあることが予想され、読者のニーズに左右されやすい出版社としても日本語の教材出版を控えるようになってくるのは当然のことだと言える。次に日本語会話教材をさらに「一般日本語教材」、「日本語会話辞書」、「旅行会話」、「ビジネス会話」とに分けて年度別に図3に示す。



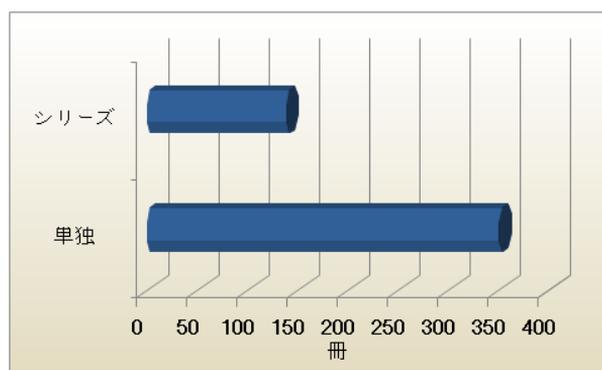
〈図 3〉 分類別会話教材の出版数

図3を見ると日本語会話教材の多くは一般会話教材で全体の74%となっている。ビジネス会話の教材は「観光業務」、「ホテル業務」、「客室業務」、「カジノ」、「ビジネス」、「免税店」、「接客業務」など種類は多様で、専門性も高く、学習者の層も限られてくる。また、旅行会話教材は旅行を目的に日本語を学習しようとする人のために書かれている。そのため、長

期的に日本語を学習するのではなく、短期的且つ単発的な動機で教材を購入することが多く、旅行先の特別な状況に対して即座に対応できる、即戦型の日本語を必要とする学習者に向いている教材である。

4.2 シリーズの有無

日本で出されている会話教材でも『みんなの日本語』のようにシリーズの教材もあれば、『マンガで学ぶ日本語会話術』のように単独で出されている教材もある。今回の調査では韓国内の日本語会話教材のうち、シリーズで出されているもの、単独で出されているものの比率を調べ、出版社の会話教材の傾向を見ていくことにする。



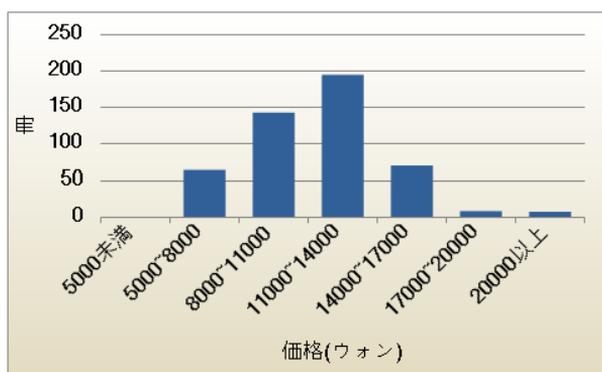
〈図 4〉 単独教材とシリーズ教材の比較

本調査では全体の72%が単独で出版されている教材で、28%がシリーズで出されている教材であることが分かった。これらの教材は教授者側と教育機関側、そして出版社側の条件などによって教材内容が様々な形で現れることになる。教育者側では自分自身の授業で使うために教材の考案をし、それを出版社に依頼するという形で出版される場合もあるし、教育機関のニーズにあった教材開発がなされ出版される場合、たとえば今回の調査で大学の教養科目として使用される教材も含まれているが、そのような教材の場合は日本語関連学科で執筆され、教養科目というレベルに見合った内容を盛り込んで大学出版部などで出版されたり、または民間の語学機関のニーズに見合った教材を語学機関系列の出版社から教材を出すということもある。出版社側の条件というのは、営利目的で出版することが前提にあるため、売れる教材、読んでもらえる教材を開発していく必要があり、

読者のニーズや教育機関内での教科目に見合った教材、また、持続的な再購入が期待できる民間の教育機関のニーズに合わせて、様々な形で教材開発をしている。

4.3 価格

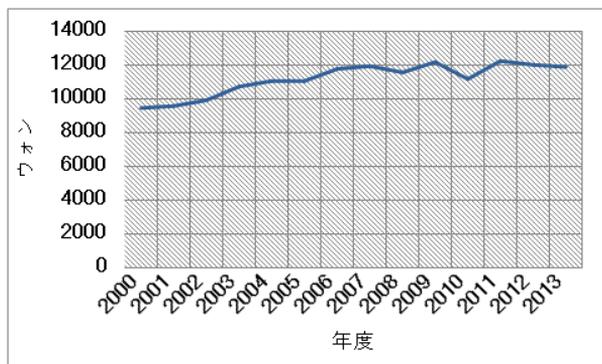
日本の日本語教材出版社のアルクで出されている会話・会話表現の教材は全部で7冊出ているが¹⁶⁾、それらの平均価格は2356円となり、外国人留学生の立場から見れば決して安いものでないと思われる。この節では韓国の日本語会話教材の価格はどのようになっているのかについて調べ、価格の分布と年度別平均価格の推移について見ていくことにする。結果は図5と図6に示す。



〈図 5〉 価格の分布

図5から分かるように11000ウォンから14000ウォンの間が最も多く、全体の40%(195冊)を占めている。二番目は8000ウォンから11000ウォンの間で、全体の29%(145冊)を占めている。次に年度別の平均価格の推移を見ていくことにする。

16) 『初級日本語ドリルとしてのゲーム教材50』、『新装版日本語集中トレーニング』、『マンガで学ぶ日本語会話術』、『CD付きなめらか日本語会話』、『話せる日本語 360枚のカードで学ぶ中級会話』、『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』、『日本語会話力トレーニングブック』



〈図 6〉 年度別教材平均価格の推移

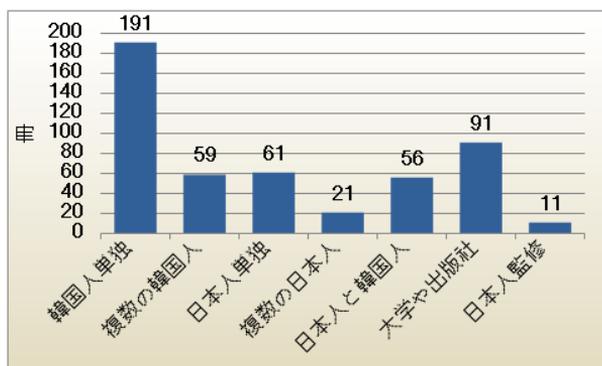
2000年から2013年までの日本語会話教材全体の平均価格は11194ウォンとなった。図6を見ると2000年から2008年まで少しずつ価格が上昇しているのが分かるが、2008年からはほぼ平行線をたどっており、価格が上がっていない。消費者物価上昇率¹⁷⁾を見ると2008年4.7%、2009年2.8%、2010年3%、2011年4%、2012年2%、2013年1.3%と2008年当時の物価に比べると2013年は17.8%上昇したという結果になるが、その上昇率から見ると2008年の平均教材価格は11577ウォン、2013年の平均教材価格は11900ウォンと、物価上昇率の影響をほぼ受けていないことが分かる。

4.4 著者

韓国の日本語会話教材の著者はいくつかの類型に分けることができる。今回の調査では①一人の韓国人著者が単独で書いた場合、②複数の韓国人著者が共同で書いた場合、③一人の日本人著者が単独で書いた場合、④複数の日本人著者が共同で書いた場合、⑤日本人と韓国人¹⁸⁾の著者が共同で書いた場合、⑥出版社の編集部や大学の編纂委員会などが書いた場合、⑦韓国人著者一人あるいは数名が書いたが監修は日本人の7つの類型が見られた。これらを類型別に分け、整理したものを図6で示すと以下の通りとなる。

17) e-나라지표 http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx_cd=1060

18) この場合は日本人一人と韓国人数名の場合と、韓国人一人と日本人数名の場合がある。



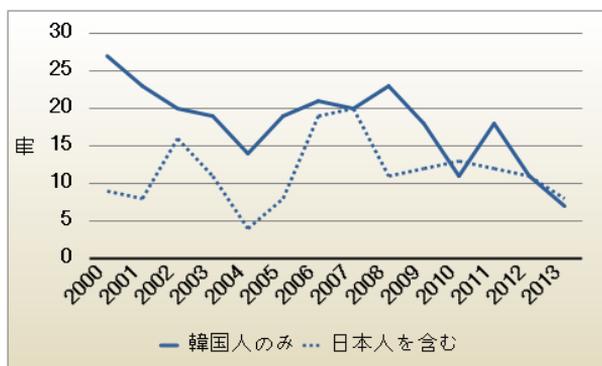
〈図 7〉 著者の類型別冊数

図7からも分かるように韓国人著者が単独で出した教材が最も多く191冊という結果となった。複数の韓国人著者を合わせると全体の51%が韓国人のみの著者となる。また、日本人だけの著者は日本人単独と複数の日本人の著者を合わせて82冊となり、全体の17%で韓国人のみで書かれた教材の3分1程度にとどまっている。

趙(2007)では大学の日本語教材での社会語用論的誤用の分析を行っているが、その中で抽出された誤用の中に「高くありませんよ。去年までは3万5千円でした。」という文があるが、この「高くありませんよ。」というのには日本の情緒では客が高いか安いかを決めるのであって、サービス業に従事している者が決めるものではないと思ってしまうが、韓国のデパートなどでは普通に使われたりしていることから韓国語の干渉から来ているものと判断される。したがって、韓国人著者のみの執筆は言語文化的な面や社会言語学的な面、また、語彙的な面からも日本人著者の執筆より誤用が発生する危険性があり、日本人の監修などを通して自然な日本語に直していく必要があると考える¹⁹⁾。今回の調査で韓国人と日本人の共著は56冊で、また、韓国人著者と日本人の監修は11冊となり、両方合わせても全体の14%に過ぎない。

ここで年度別に韓国人著者のみの教材の出版数と日本人著者あるいは監修が一人でも含まれている教材の出版数の比較をしてみることにする。

19) 日本人が監修をしたとしても完全に修正できるとは限らないことも指摘しておく。



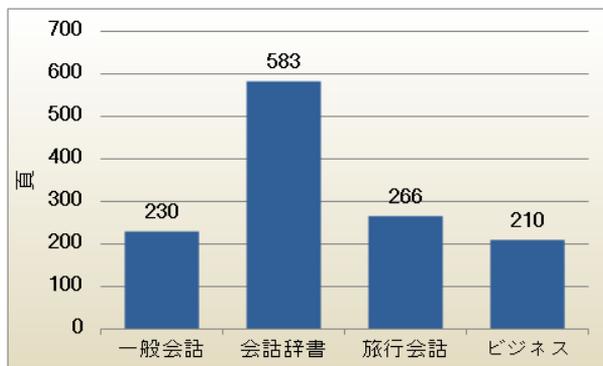
〈図8〉 韓国人著者のみの教材と日本人を含む教材の出版数

図8を見ると2000年から2006年までは韓国人著者のみの出版数が日本人を含む出版数よりもある一定の間隔を置いて多くなっているが2007年に両者の数が一致した。また、2008年度から差が開きはじめるが、2010年で日本人を含む出版数が韓国人著者のみの出版数を上回る。しかし、2011年にまた大きな差を見せ、2012年は出版数が同じとなり、2013年はわずかであるが、日本人を含む出版数が韓国人著者のみの出版数を上回っているのが分かる。2011年から出版数は減っているものの今後は少しずつ日本人を含む執筆が多くなっていく可能性はあるように思える。

4.5 教材の頁数

日本で出版されている教材の中で『みんなの日本語(スリーエーネットワーク)』があるが、教材の頁数を見ると初級Ⅰは203ページ、初級Ⅱが247ページ、中級Ⅰは203ページ、中級Ⅱは249ページと平均226ページの構成となっている。また、『できる日本語(アルク)』の頁数を見ると初級が302ページ、中級は245ページで平均274ページとなっており、出版社や著者によって頁数はみな違って来る。教材の量、すなわち頁数というのは日本語教育機関でのカリキュラムや学習時間、また、著者や出版社による教材の構成や内容の盛り込み方などによって当然のごとく変わってくる。この節では韓国の日本語会話教材ではどのくらいの頁数で構成されているのかを会話教材の種類別に見ていくことにする²⁰⁾。

20) 今回の調査で頁数が掲載されていない会話教材10冊は除いた。

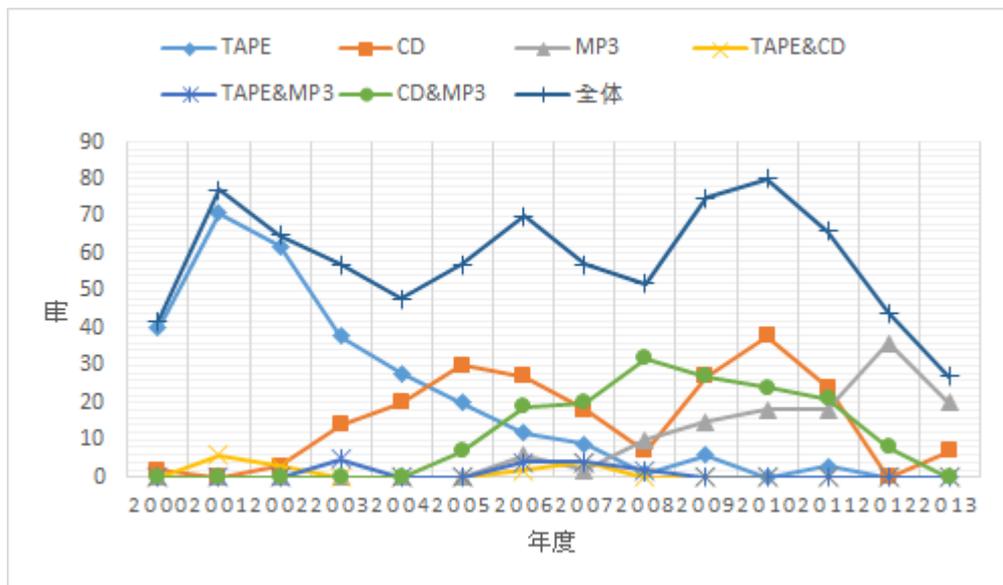


〈図 9〉各教材の種類別平均頁数

図9を見ると会話辞書の頁数が最も多く583ページであったが、これは教材自体の平均サイズが13.9×19.7センチとA5サイズ用の紙よりも小さいことから、その分頁数が増えたと言える。また、旅行会話も平均サイズが12.6×18.8センチと会話辞書よりもさらに小さいポケットサイズとなっているため「一般会話」や「ビジネス会話」の教材よりも頁数が多めになっている。

4.6 カセットテープやCD、MP3の有無

韓国の語学用テープは1970年代の後半から徐々に普及し始め、1980年代に人気を集め、そのあとは次第にテープからCDへと形を変え、さらには各出版社のホームページからMP3ファイルをダウンロードして音声聞けるにまで至った。この節では日本語会話教材の付属教材としてのカセットテープやCD、MP3ファイルについて2000年以降の総出版数に対する割合を見ていくことにする。抽出した490冊の教材を手作業で調べ、それを図9に表す。



〈図 10〉 各音声補助教材の総出版数に対する割合

テープという付属教材は2000年から出てきたわけではなく、すでに1970年代の後半あたりから出てきたとされる。図10では2001年をピークに次第にテープを付属教材として使う教材は減っていき、2005年にCDの数を下回った。さらに、2008年以降は全体の付属教材の6%以下にまで落ち、2012年と2013年には一つも使われていない。また、MP3ファイルの登場は2008年から2012年までの5年間徐々に増え、2012年の割合ではその年の全体付属教材のうち82%がMP3ファイルであった。MP3ファイルは音声をデジタル化し、音楽と同様パソコンやMP3プレーヤー、タブレットPC、スマートフォンなどに入れて、時や場所に関係なく音声聞けるという利便性のため今後も語学の付属教材として多く利用されることが予想される。全体では2001年や2010年ではほぼ80%近くの教材で音声付きの付属教材が使われていることが分かる。また、年度別に多少の差は見られるが、全体的には平均58%の教材で何らかの音声聞ける付属教材が付いているということになる。

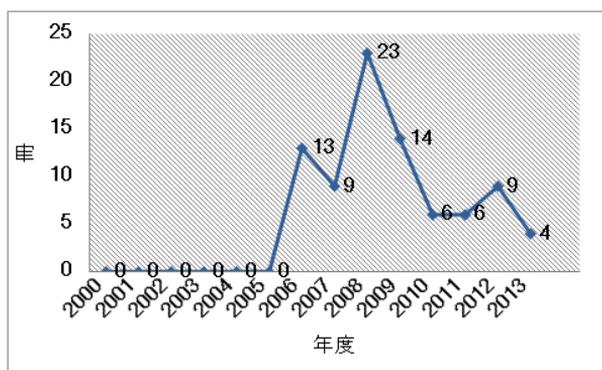
第2言語習得では「インプット」、つまり「聞くこと」、「読むこと」などは学習者の運用力の向上につながり、「アウトプット」、つまり「書くこと」、「話すこと」に直接働き掛ける重要な役割をしている。また、聞く場合でも、当然聞き取れない言葉や表現などが出てくるが、それら「理解できないものを含んだインプット」を学習者は「文脈」や「場面」を手がかりとし、自分自身の「背景知識」を使って、内容を「予測」したりしながら理解を補っている。

この「理解を補う」ということを経験させることが非常に重要である。そのためにも音声で録音されている付属教材を聞いて学習するということは日本語習得には欠かせないことだと言える。

4.7 電子書籍

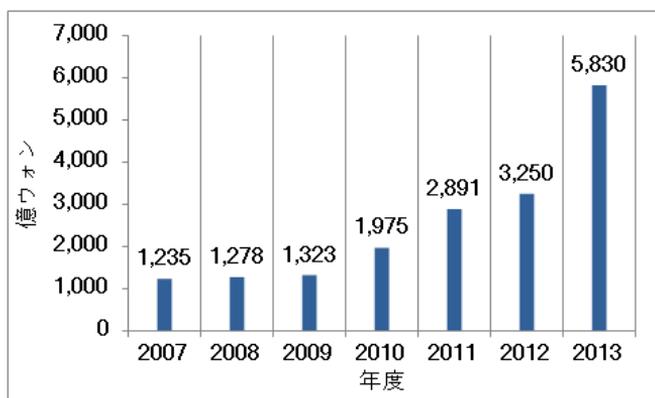
4.7.1 日本語会話教材の電子書籍年間出版数

電子書籍とは、コンピューター通信やインターネットでPDFファイル化された本をダウンロードし、パソコンや個人の携帯端末機の画面を通して読むことのできるコンテンツのことである。電子化された雑誌や小説などがここ数年で急速に普及している。この節では日本語会話教材における電子書籍の普及がどの程度なされているのかを見ていくことにする。各年度別累計は図10に示す。



〈図 11〉 電子書籍の各年度別出版数

2000年から2013年まで出版された日本語会話教材の電子書籍は計84冊で、図11で分かるように日本語会話教材における電子書籍の登場は2006年からとなっている。2008年まで急速に拡大したように見えるが、2009年からは下降傾向となっている。



〈図 12〉 韓国の電子書籍の年度別規模の推移²¹⁾

図12は韓国の電子書籍の年度別規模を表すグラフであるが、2010年からは電子書籍市場の急成長が見られる。図11からも分かるように韓国の電子書籍市場は年々増加傾向にあるにも関わらず日本語会話教材の電子書籍販売が低迷しているのは明らかに日本語に対する需要が減少していることを意味すると思われる。

4.7.2 電子書籍の価格

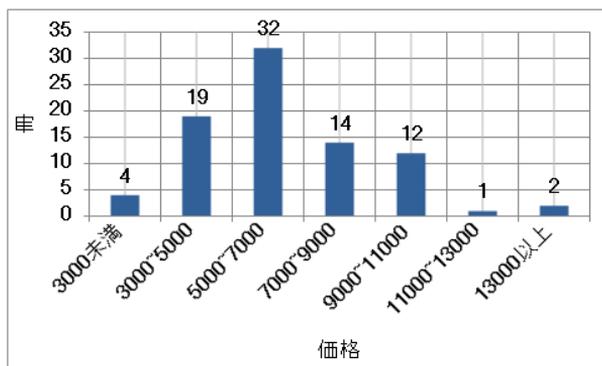
インターネット書籍サイト「教保文庫」の日本語会話教材の販売量で2位となった「이것이 독학 일본어 첫걸음이다²²⁾」の紙の本の定価は13000ウォン、電子書籍の定価は5500ウォンとなっており、紙の本の定価の42%の価格となっている。それに対し、「教保文庫」の週間電子書籍集計で4位となった「잡담이 능력이다²³⁾」の場合では紙の

本の定価は13000ウォン、電子書籍の定価は9100ウォンと定価の70%となっており、語学教材と一般書籍では定価に対する電子書籍の価格設定がかなり違っていることがわかる。この節では韓国の日本語会話教材の電子書籍では価格設定はどうなっているのか、また、紙の本の定価の何%で販売されているのかを見ていくことにする。まずは価格の推移を図12に表す。

21) <http://www.kepa.or.kr/Certify/Intro.aspx> 韓国電子出版協会

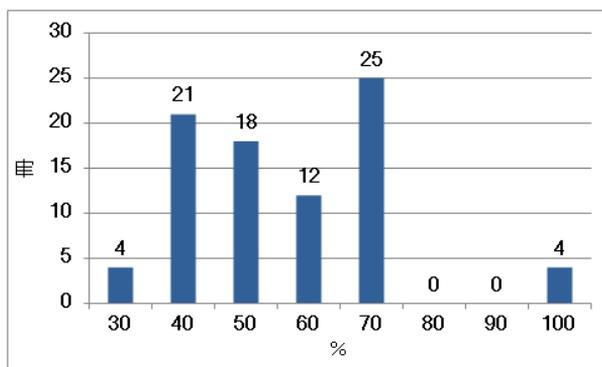
22) 2014年3月13日現在の販売量を基準にした。1位の「시뮬레이션 일본어 회화」は電子書籍がないため除外した。

23) 2014年3月13日現在の販売量を基準にした。1位から3位までは電子書籍のみの出版のため除外した。



〈図 13〉電子書籍の価格の推移

図13から分かるように価格設定で最も多かったのは5000~7000ウオンの32冊で全体の39%を占めている。次に多かったのは3000~5000ウオンの間で19冊となった。全体的に見ると7000ウォン以下の電子書籍が55冊で、全体の65%を占めており、また、全体平均価格は6525ウォンとなった。次に紙の本の定価に対する電子書籍の比率を見ていくことにする。



〈図 14〉本の定価に対する電子書籍の価格比率

図14の中でもっとも多かったのは紙の本の定価の70%で25冊で、全体の30%を占めた。また、定価の40%も二番目に多く、21冊で全体の25%となった。日本で出版されている日本語教材、たとえば『なっとく知っとく初級文型50』では紙の本の価格は1728円であるのに対し、電子書籍の価格は1404円と、81%の価格で販売されているが²⁴⁾、韓国の日本語会

24) 日本における日本語学習者のための電子書籍はまだ多くなく、紀伊国屋書店で「初級日本語」というキーワードを打っても1冊(『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育』)しかヒットし

話教材の電子書籍の価格の全体の平均は定価の56%となり、本の定価より電子書籍の価格設定がかなり低くなっていることが分かった。

5. おわりに

日本語会話教材の主目的は「話す」ことができるようになることに重点が置かれているはずである。「話す能力」とは、つまり、さまざまな状況に必要な言葉、たとえば依頼したり、勧めたり、あるいは断ったりするための機能的な会話力や相手の話を聞いて自分なりの意見などを話す会話力などを言う。これらの力を身につけさせるために執筆者たちは学習者に必要な学習項目を決め、本文や文型、文法、語彙、対話練習などの内容を盛り込み、いかに効率的に学習できるかを考えていく。日本でも数多くの会話教材が出されているが、それらの教材に依存せず韓国ならではの教材を開発し、何百冊にも及ぶ会話教材を出版していることは韓国の日本語学習者のコミュニケーション能力向上に大きく貢献していると言えるであろう。しかし、今回の調査で明らかになったように高校での日本語学習者の激減やそれに伴って出版される会話教材の減少傾向、また、電子書籍出版数の低迷などを見ると韓国全体の日本語教育の展望が決して明るくないことを示している。それが一時的なものなのか、継続していくものなのかは分からないが、日本語会話教材の長期低迷などを考慮すると出版者側としては新しい投資をして新教材を開発してショートセラーを狙うよりはロングセラーを狙った出版ができることが望ましく、そのためには執筆者の韓国人学習者の情緒に合った教材開発研究、学習者に長く愛されるための緻密な教材研究が必要となってくるであろう。

今回の調査は総括的な調査分析にとどまり、各教材の構成やシラバス、挿絵や字体などより深い調査にまでは至らなかった。それを今後の課題としていきたい。

【参考文献】

- 栗飯原(2008)「中級会話教科書の変遷」『同日語文研究』第23輯, 同日語文学会, pp.59-68
 青木直子・尾崎明人・土岐哲(2001)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社, pp.22-24

ない。ちなみに『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育』の電子書籍も紙の本の定価の80%で販売されている。

- 金玄珠(2007)「초급 일본어 교과서에 대한 해제-『みんなの日本語』와『SF』를 중심으로-」『인문학연구』제34권 제3호, 忠南大学校人文科学研究所, pp.57-76
- 檢校裕朗·奥村洋子·安容柱(2005)「会話教育と教材研究」『日本語教育研究』第9輯, 韓国日語教育学会, pp.19-30
- 国際交流基金(2008)『聞くことを教える』ひつじ書房, p.18
- 趙南星(2007)「대학교의 일본어 교재에 나타나는 사회어용론적인 오용의 분석과 평가」『동북아문화연구』제12집, 東北アジア文化学会, pp.333-358
- _____(2010)「한국에서의 일본어 교재 관련 연구의 현황 및 과제」『日本語教育』第53輯, 韓国日本語教育学会, pp.57-76
- 沈芝媛(2000)「日本語教材分析に関する研究」『東西論文集』第16輯 東西大学校, pp.215-232
- 吉岡英幸(2012)「日本語教材の変遷と新しい動向」『日本語教育研究』第24輯, 韓国日語教育学会, pp.7-19
- 和田綾子·宋承姬(2012)「学習動機と継続的な学習の関連性について-韓国人日本語学習者を対象に-」『日本語教育研究』第24輯, 韓国日語教育学会, pp.213-225

【参考Webサイト】

- 韓国電子出版協会 <http://www.kepa.or.kr/Certify/Intro.aspx>
- 『教育統計年報』(2010) <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/korea.html#JISSHI>
- 紀伊国屋書店 <http://www.kinokuniya.co.jp>
- 教保文庫 <http://www.kyobobook.co.kr>

논문투고일 : 2014년 06월 10일
심사개시일 : 2014년 06월 20일
1차 수정일 : 2014년 07월 09일
2차 수정일 : 2014년 07월 15일
게재확정일 : 2014년 07월 20일

〈要旨〉

韓国の日本語会話教材に関する傾向分析

本研究は2000年から2013年にわたり韓国で出版された日本語会話教材の傾向を分析することを目的とする。調査を行う内容は以下の通りである。①各年度別出版数②シリーズ物であるかどうか③価格④著者(韓国人著者なのか日本人著者なのか)⑤各教材のページ数⑥音声付属教材の有無などを調査する。

調査結果を見ると、2006年から2008年にかけて最も活発に日本語会話教材が出版されており、日本語教材開発の全盛期だと言える。また、高等学校第2外国語として日本語を学ぶ学習者の数が2012年から前年度の3分の1程度まで急激に下がっており、それに比例するかのようには日本語会話教材の出版数も2013年では15冊であったが、これは2006年の全盛期に比べ3分の1の数に過ぎない。また、シリーズ物については全体の28%を占めており、残りの78%は単独で出版されており、また、全教材の平均価格は11,194ウォンで、消費者物価上昇率に比べれば教材の価格が上がっていないことが分かった。著者については全体の51%が韓国人のみの著者となっており、日本人のみの著者に比べて3倍も多い数字となった。音声付属教材については2005年を基準としてテープの数よりCDの数が上回り、MP3ファイルは2008年から登場しはじめ、2012年まで増加する傾向にあったことが分かった。最後に電子書籍の登場は2006年からで、2008年まで急速に拡大するかのように見えたが、2008年度以降から反対に縮小傾向を見せ、これは韓国の電子書籍規模が2008年から何百億ウォンずつ成長を遂げているにもかかわらず、日本語会話教材販売が低迷していることは日本語会話教材に対する需要の減少、さらには日本語学習者自体の減少を意味していると言える。

Analysis on the Trend of Japanese Conversation Materials in Korea

This study aims to analyze the trend of Japanese conversation materials published in Korea between 2000 and 2013. Components covered by this study are as follows: ① volumes of publications by year ② number of edition(s) ③④ prices ⑤ authors (nationality of author(s) : Korean or Japanese, number of author(s)) ⑥ number of pages ⑦ supplementary audio materials

Looking into the result, Japanese conversation materials were most numerously published between 2006 and 2008, so this period is considered a golden age of their publications. In addition, since 2012, the number of high school students learning Japanese as a second foreign language has sharply decreased to one third as many as in 2011. Along with its downturn, total volumes of Japanese conversation materials published in 2013 decreased to fifteen which were only one third compared to the volumes in 2006. In terms of the number of edition(s), it was found that 28% of the published materials had multiple editions, and the rest(78%) had a single edition. As to prices, the average cost of the materials was 11,194 Korean won which indicated there was no big increase in comparison with inflation of the consumer price. Looking into authors, 51% of the materials were published by Koreans only, which were three times as many as Japanese-only authors. When it comes to supplementary audio materials, the number of CDs exceeded cassette tapes compared to 2005, and MP3 files emerged from 2008 and mounted up to 2012. Finally, Japanese conversation materials in an e-book type appeared from 2006, and seemed to be popular up to and decreased since 2008, while e-book business in Korea showed big growth by two-digit billion Korean won from 2008. Despite its market growth, demand for Japanese conversation materials in an e-book type only decreased which indicates the number of Japanese learners decreased.